

癍痕文身から化粧へ

ブルキナファソ西部の身体装飾にみる アイデンティティの受容と操作

板坂真季

はじめに

ブルキナファソ西部地域には、癍痕文身の習慣がながらく残っていた。癍痕文身とは、皮膚に切り込みを入れて、身体に二度と消えることのない模様を描く習慣である。

ヌヌマは、ブルキナファソ西部に居住する小規模民族集団だ。この地域は小学校の建設が遅れたこともあり、公用語であるフランス語もほとんど通じず、隣接する他の民族集団にくらべて従来からの習慣も比較的好く残している。たとえば、ブルキナファソ西部ではもうあまりおこなわれていない長老主導の盛大な成人儀礼も、調査対象としたS村をはじめ、多くのヌヌマの村ではいまだおこなわれている。しかしそのためか、隣接民族集団の人々からは、野蛮であるとか呪術を使うとかと評されている。そのようなヌヌマ社会も、近年は隣国コートジボワールでの出稼ぎからの帰村者が増え、生活状況や価値観が大きく変わりつつある。

本稿では、ヌヌマ社会における女性の癍痕文身の衰退と、それにとまなう化粧法の変化について

報告する。そして両者の関連性を検討することから、彼らのアイデンティティ表象の変遷過程をあきらかにしたい。なお、ここでは化粧とのかかわりという観点から癍痕文身を述べるため、考察対象を女性にしぼった。

ヌヌマの癍痕文身

今世紀初頭あたりまでのヌヌマ社会には、現在のように、体の大部分を隠してしまうような衣服を身につける習慣はなかった。腰に帯状の細長い布を巻きつけるだけで、衣服で覆わない部分の皮膚には癍痕文身をほどこしていた。しかし、顔以外の身体部位への癍痕文身は、癍痕を覆い隠してしまう衣服の普及とともに、徐々におこなわれなくなる。私が調査をしていたS村ではかれこれ25年以上、腕や胸への癍痕文身はおこなわれていない。そのような顔以外への癍痕文身は10代後半以降の女性がおこなうため、現在、胸や腕に癍痕のある最後の世代は40代半ばとなっている。

顔以外への癍痕文身は一定年齢以上の女性におこなうのにくらべ、顔へのそれは生後間もない時

期の乳児におこなう必要がある。顔のなかで必ず
癍痕をほどこさねばならないのは、両目の横、鼻
(顔を一文字に横切るライン)、両頬、下唇の計6カ
所だ。これにくわえ、眉間や顎にもほどこされる
ことがある。

小刀を用いてじっさいに癍痕文身をおこなうの
は、何カ村かに1人いる専門の施術師だ。施術師
によって癍痕の模様や位置に若干の相違があるた
め、そこからだいたい出身村が割りだせる。さら
に、目の横と頬の癍痕の模様には若干のバリエ
ーションをつけることができ、どのような模様
にするかは母親が決める。そのため、微妙な模様
の差異から個人の特定も可能であった。なお、施
術を強制されない眉間と顎に癍痕をほどこすかど
うかも母親だけで、母親は自分と同じ場所への
癍痕を娘にほどこす傾向がある。そのため眉間と
顎の癍痕の有無は、母娘で一致する確率がきわ
めて高い。しかし癍痕のつけ方が多少ことなる
他村から嫁いできた女性の場合、娘にほどこす
癍痕を、夫の他の妻や義弟の妻といった一緒
に生活をおくる女性たちと同じにするという傾
向も指摘できる。

このような癍痕文身をおこなう理由として、
ヌヌマの人々は次の二つをあげる。ひとつは、
ヌヌマであるかどうかの識別のため、という理
由だ。ほとんどの近隣民族集団にも癍痕文身
の習慣はあるが、癍痕の模様や位置は集団ご
とにことなる。さまざまな民族集団が入り乱
れて居住する同地域において、癍痕は仲間を
見分ける確実な指標になっている。もうひとつ
の理由として彼らがあげるのは、かつては頻
りに起こったという誘拐への対策だ。誘拐さ
れて何年かたって戻ってきた子どもを、癍痕
によって見分けるというのだ。じっさいに、
誘拐された子どもが数年後に村に帰ってきた
事件を記憶している老人もいた。

このように、癍痕からはその子どもが属する民

族集団を容易に判別することが可能で、傷のつ
け方の相違からは出身村が推察できる。さら
に模様の微妙な差異から、誰の子どもかとい
うことまでわりだすことができるのである。

癍痕文身の衰退

腕や胸への癍痕文身がまったくおこなわれ
なくなって5年ほどした1970年代半ば、今
度は顔への癍痕文身も廃止の方向へと動き
だす。これには次のような理由が考えられ
る。

まずは、コートジボワールへの出稼ぎから
帰ってきた人々の影響だ。コートジボワール
には、ヌヌマ社会にあるような癍痕文身の
習慣は、少なくとも当時はまったくなかつた。
そのためヌヌマの人々は出稼ぎ先で、顔の
癍痕にかんしてさまざまな侮辱を受けたら
しい。かつては隣接民族集団もふくめ、ヌ
ヌマを取りまくほとんどすべての人々の
顔に癍痕があった。そこではどのような
癍痕を子どもにほどこすのが問題であつて
、癍痕文身をおこなうこと自体は疑うこと
のない大前提だつた。しかしヌヌマの人々
は、わが子が自分たちのように将来コ
ートジボワールへ出稼ぎに行くことを考
え、癍痕文身をおこなわないという可能
性についても検討する必要が出てきた。し
かし当初は出稼ぎ帰りの人々も、すぐに
子どもへの癍痕文身をやめたわけではな
かつた。癍痕文身が廃れはじめるのは、
出稼ぎ先で生まれたため、癍痕文身をま
ったくおこなうことができなかつた子ど
もたちが村に増えてからだ。このような
癍痕のない子どもが共住する親族に増
え、村で生まれた子供にも癍痕をほどこ
さないという選択がしやすくなつた。さ
らには誘拐もすでになく、癍痕が子ど
もの識別に役立つこともない。こうして
ヌヌマでは、癍痕文身が徐々におこな
われなくなつてきた。

しかし顔への癩痕文身の廃止は、ある娘を境に、母親がびたりとやめてしまうといたかたちでは起こらなかった。ある娘には頬への癩痕文身をやめるが頬以外にはほどこし、次に生まれた妹には頬へやめるのにくわえ鼻へもやめるといったぐあいだ。一般的に、それまで強制的におこなわれてきた6カ所のうちでは、頬、鼻、目の横、口の順でおこなわれなくなったようだ。だから同じ母親のもとに生まれても、癩痕のある顔の部位がことなるという姉妹がこの時期より増えはじめた。また、母親によって、癩痕文身をやめる決断をする時期がことなるため、同年代の少女たちにも癩痕の状況にばらつきがみられる。後述する調査において対象とした27名の女性たちを例にとってみよう。このなかに14歳の少女は8人いる。かつて癩痕文身が強制されていた箇所についてだけ見ても、6カ所すべてに癩痕があるものが3人、3カ所にあるものが3人、残る2人には癩痕はなかった。

なお、S村では現在5歳になる子どもを最後に、癩痕文身はおこなわれていない。

新しい化粧法

このような癩痕文身の衰退と時を同じくして、ヌヌマの若い娘たちの間には、新しい化粧法がはやり始める。ヌヌマでは、もともと眉と目の下を濃紺の顔料で描くという化粧法があった。そこへ、外国の工場で大量生産された化粧品を使った新しい化粧法がはやりだした。それは、ピンクやブルーなどの彩り鮮やかなマニキュアやアイライナーといった化粧品で眉間や頬に幾何学模様を描くという方法だ。それまでもこのような化粧品は市で商われていた。それが比較的安価なものが大量に出まわるようになったことと、村の女性たちが現金収入を得られるようになった事情とが重なって、

彼女たちの手にも入るようになった。

S村でこの化粧法を最初におこなったのは、現在20代半ばにあたる女性たちで、10年ほど前のことだ。この新しい化粧法を始めた最初の少女たちは、ちょうど顔への癩痕文身の習慣が衰退しだした頃に生まれた子どもたちだ。そのため彼女たちの顔の癩痕は、あるものにはすべてそろっており、あるものには頬の癩痕が欠けているという状況だった。そして当初この化粧法は、癩痕を一部欠く少女が、その欠けた部分に模様を描くことから始まっている。現在はどうかであろうか。1997年1月1日のS村の女性の化粧をみてみよう。

ヌヌマの村には、1月1日に着飾って村中を挨拶してまわる習慣がある。もちろん化粧をする女性も多い。1997年のこの日、村長宅に新年の挨拶に訪れた約120名の女性のうち、新しい化粧法で化粧をしていた女性は27名だった。この27名は上が22歳で下が9歳、平均年齢は14.7歳である。頬に癩痕のない女性は20名いたが、そのうち1人をのぞいて残り全員が頬に化粧をしていた。逆に、頬に癩痕がある7名のうち、癩痕に重ねるようにして頬に化粧をしていたのは1人だけで、他は頬には化粧をしていなかった。このように癩痕の欠けた部分に化粧をほどこすという傾向は、今も顕著である。

最近、化粧をもっともおこなう10代の少女たちにおいて、頬や鼻に癩痕のある女性が少数派になった。すると頬をはじめとする顔の癩痕が6カ所ともそろっている少女が、癩痕の全くない少女たちがやるような化粧を癩痕の上からほどこす例が、わずかながらみられるようになった。上述の1例だけあった、頬に癩痕があるにもかかわらず頬に化粧をほどこした少女はこれにあたる。癩痕のある少女が、大多数の癩痕のない少女たちと一緒に化粧をするという状況下において、少数派が多数派の少女たちに同調した結果と考えられる。

これが村と町を行ききする女性になると少し複雑な展開をみせる。たとえば町の高校へ進学し、休みの間だけ村へ帰ってくる女子高生たちだ。

現在、10代後半にあたる彼女たちは、ちょうど顔の癍痕がもっともバリエーションに富む世代にあたる。顔のすべての部位に癍痕を持つ少女はまれで、たいていは同母の姉たちより癍痕が少ない。けれどもヌヌマは近隣民族集団のなかでは最後まで癍痕文身の習慣を残したため、顔に癍痕があるのは、クラスでもヌヌマ出身の彼女たちだけという状況だ。そんな彼女たちは、町にいるときは欧米のアフリカ系女性がするような町式の化粧をし、頬や額に模様を描く村式の化粧を評して野蛮だと言ってはばからない。しかし休暇で村へ帰るときには、マニキュアやアイライナーをかならず買って帰る。そして数学記号や数字といった村の女性たちの知らない「模様」を化粧に取り入れ、積極的に村式の化粧に励むのである。

このような場合、彼女が町にいるとき演出するのは、村式の化粧が野蛮であることを理解している「町に住む“文明化”された人間」であり、さらには町式の化粧をする、「おしゃれに関心のある女子高生」である自分だ。けれども村から出たことがなく、町式の化粧をした女性を見る機会にも恵まれない少女たちがほとんどの村にあつて、町式の化粧が「おしゃれ」であることを理解してもらうのはむづかしい。そこで女子高生たちは、今度は村の人たちに解読可能な記号、つまり、村式の化粧法を利用することになる。そこで彼女たちは「おしゃれである」ことの他に、村の女性にとっては高価な化粧品を多用することで「学校にいける財力の持ち主」であることを、そして高校生ならではの模様を化粧にとり入れることで、「勉強ができたので選ばれて高校へ通う高校生」である

ことを村の人たちに示すことができるのだ。

村と町とで化粧法を変える女子高生は、自身のアイデンティティの操作を化粧によっておこなっているといえる。

おわりに

かつてのヌヌマ女性は生まれて間もない時期に、癍痕文身という永続的な身体装飾法により、そのアイデンティティを目に見える形で肌に刻みつけられた。癍痕を刻まれた女性は、ヌヌマであり、S村の人間であるということ、布に覆われることのない顔において表明することとなる。そこに本人の選択の余地はない。かろうじて母親には若干の模様の選択が許されていたが、意識的にせよそうでないにせよ、結果的には帰属する親族集団の女性たちの癍痕の模様に同調しがちであった。しかし癍痕文身の習慣が衰退する過程で、母親には選択のはばがひろがる。さらにその子どもたちが成長すると、今度は化粧という一時的な身体装飾が癍痕にくわる。この新しい化粧法は彼女たちに、自身のアイデンティティの村と町とでの使い分けを可能にした。

このように、癍痕文身から新しい化粧法へという身体装飾法の変化は、社会や両親から与えられ受容せざるをえなかったアイデンティティが、個人で操作可能になる過程といえる。それは、永続的で変更が不可能であった身体装飾から、一時的で変更可能な身体装飾への移行によってなされた。このような身体装飾の変容は、近代ヌヌマ社会において、身体がアイデンティティの受容体から、アイデンティティを操作し表現する場へとなったことを示唆してはいないだろうか。

(いたさか・まき/京都大学大学院人間・環境学研究所)